

第1章

折り紙の姿

1 折り紙の誕生

折り紙は必ずしも日本だけのものではなく、ヨーロッパにもありました。しかし、農耕民族特有の勤勉さ、四季が育んだ美意識と物事の本質を見抜く力があいまって、日本の折り紙が世界から評価され、「Origami」が誕生します。

紙の誕生

折り紙を紹介する前に、紙の歴史について振り返ってみましょう(図)。紙が誕生するまでは竹や木が使われていました。これらはかさばる上に高価だったため、書写材料の研究が進んで、紙の誕生へとつながります。

日本には飛鳥時代、高麗から紙漉きと墨の製法が伝えられました。西方に初めて製紙法が伝えられたのが日本への伝来から140年以上もあとだったことを考

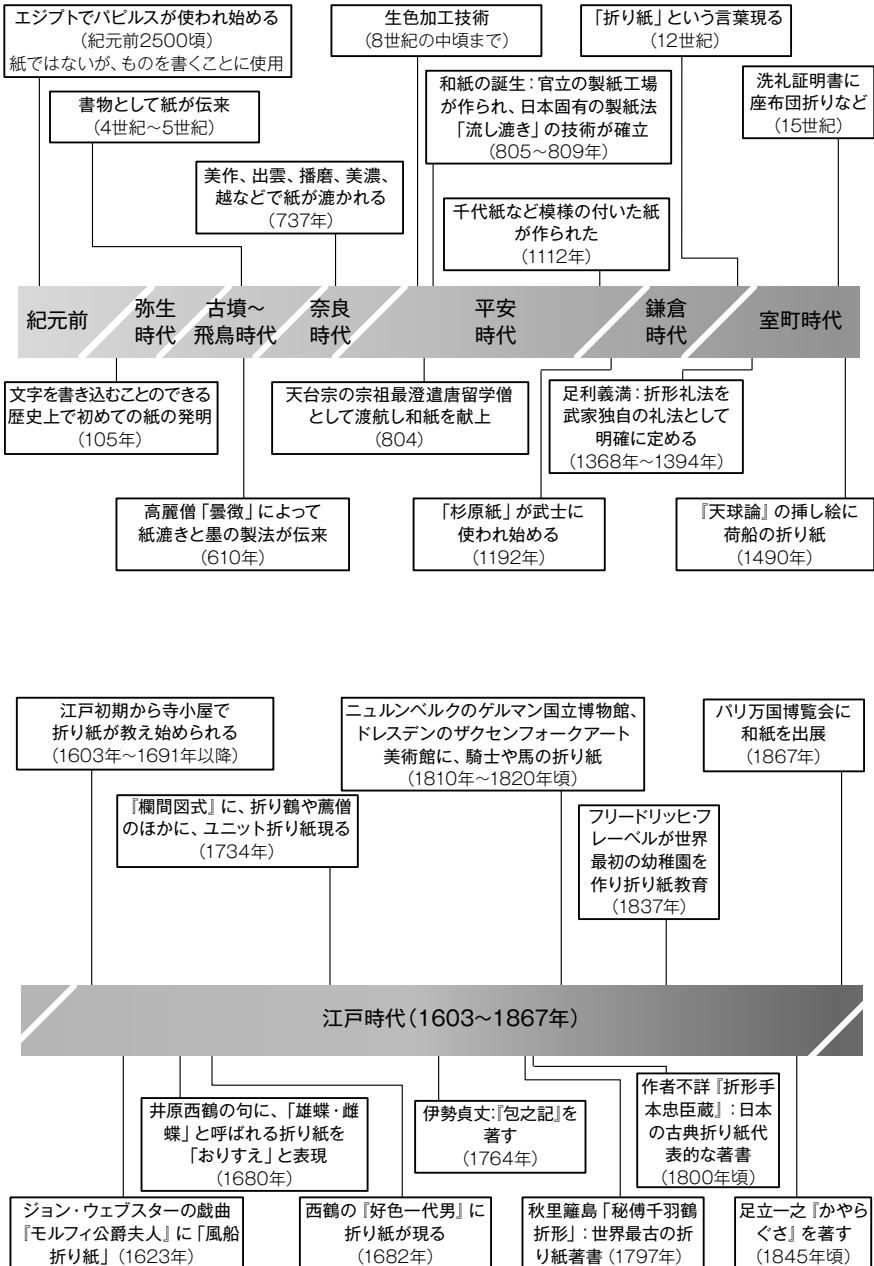
えると、飛鳥時代の伝来は日本の文化にとって、また折り紙にとって幸運な出来事だったといえます。当時、大陸との関係が非常に良好だったことが起因しているでしょう。

紙そのものは、飛鳥時代以前に書物として伝来していたと推測されています。この「世紀の発明」を目前にして、日本人の「つくる」ことで理解するものづくり精神に火が付いたことは間違いありません。

紙の国産化と用途の広がり

奈良時代、紙の国産化が始まり、平安時代には日本固有の製紙法「流し漉き」の技術が確立されます。これは紙を漉く時に、揺すりながら紙の層を形成する方法で、植物の粘性物質を使用します。これが和紙です。また、金箔や銀箔を散りばめるなど、独特の工夫で

紙と折り紙の歴史



美しい和紙へと発展させ、日本を代表する製品へと進化していきます。

主に記録用途に使われていた紙は、神への供物を包むといった神事にも重宝され、儀礼折りへと発展していきます。「紙は文化のバロメーター」とよくいわれますが、まさに平安時代は紙の需要が急速に拡大した時代だったのです。

その後、模様のついた千代紙や、実用的で丈夫な紙など、さまざまな紙が誕生していきます。

紙の普及と折り紙の庶民化

江戸時代になると、庶民にも紙が手に入るようになり、折り紙が楽しめるようになりました。その様子が浮世絵に残っています。また、折り鶴や奴さんといった折り紙が着物の柄に採用されることもありました。儀礼折りに対し、遊戯折りと呼ばれることがあります。

折り紙の折り方を記録した文書も出版され、いかに折り紙が普及していたのか伺うことができます。江戸時代には、手裏剣のように同じ形に折った折り紙を組

み合わせるユニット折りが誕生していたそうです。私たちにとって身近な折り紙の基礎は、江戸時代にできあがっていたのですね。

ヨーロッパでの折り紙

ヨーロッパでの折り紙について触れてみましょう。日本の折り紙と似たものが13世紀の資料や17世紀の戯曲などに見られます。ただし、どこまで日本の折り紙と関係があるのかは分かっていません。

ヨーロッパでの代表的な折り紙として、スペインで「pajarica」（小鳥の意味）と呼ばれている折り紙があります。日本では見えない折り方です。一方、折り鶴はヨーロッパでは見られません。日本とヨーロッパ、独自に発展していった可能性を感じます。

江戸時代の鎖国から開国を経て、折紙技術の交流があったと考えられます。また、西洋の教育制度を日本が取り入れた際、互いの折紙技術が融合したようです。

折り紙の呼び方

各国の「折り紙」の呼び方を見てみましょう。ドイ

ツ語で「papierfalten」、英語で「paper folding」、スペイン語では前述の「pajarita」が折り紙全般を指すそうです。

それでは、折り紙の作品は誰が名前をつけたのでしょうか。折り方や折り紙名は伝承され、誰がつけたか、また作ったかは記録に残っていません。しかし、20世紀になると、折り紙は「作品」として社会に認められるようになります。ここから「近代折り紙」が始まるのです。

2 近代折り紙

近代折り紙は1950年頃から広がり始めました(図)。具体的には内山光弘氏(1878~1967)からだといわれています。内山氏は自らの作品に対して特許権を登録しました。折り方に対して知的所有権がある、という考え方は近代折り紙に大変重要な考え方です。

また、近代折り紙において特徴的なのが「折り図」です。完成品の再現性が重視されるため、すべての工程が書き表されています。これが折り図です。折り方を図に示すことは、日本の古典折り紙でも行われていました。しかし、すべての工程を描くものではありませんでした。

折り紙のバズルの側面も、近代折り紙の特徴かもしれません。1枚の正方形の折り紙を、糊やはさみを使わずに折るといふ制約の中で完成させるといふもので

す。近代折り紙の端々に「こだわり」が見えます。

近代折り紙の作家たち

折り紙の普及には、近代折り紙の作家たちの貢献が大きく影響しています。吉澤章氏、高濱利恵氏、本多功氏、ロバート・ハービン氏、ガーション・レグマン氏、リリアン・オッペンハイマー氏、サミュエル・ランドレット氏、ピセンテ・ソルザノ・サグレド氏らが国際的な折り紙サークルを形成し、各国から出版された折り紙の本を日本語と英語に翻訳し、出版しました。「Origami」という言葉の誕生や国際的な標準といった、国を越えて折り紙の文化が形作られていったのです。